

わが古里は、いま

原発が爆発した町

安全でクリーンなエネルギー
それを生み出す原子炉が爆発した
安全神話のウソがばれ
物々しく建てられた神殿が
白日の下に暴かれた廃墟
その満身創痍の体内からは
どうしようもない放射性物資が
絶え間なく吐き出されて
田畑や森林
川や海を汚染している
原発建設で潤う町
それを約束した原発が爆発した
バラ色の言葉に操られ
カネがばらまかれた町からは
神隠しにあったように人が消え
音もなく放射能が降り積もる
町を追われた人の心には
不満や葛藤
不安と絶望が蓄積して
消えることはない

安全を信じた原発が爆発した
蜃気楼のように福島原発の遠景が
茶の間のテレビに映し出され
そこでどんなことが起きていたのか
これから何が起きるかも知らされず
人々は見えない
恐ろしい放射能の恐怖に追われ
北へ、
西へ、
南へと逃げ惑った

今は電気も電話も使えるし
水も食料も買えるし
車もすいすい通っているし
マスクをしている人もいないし
元の町に戻ったかのようにだ
だがちょっと待てよ
停車したままの電車
門を閉じたままの保育園
店を閉じたままのスーパー

待ちわびた春なのに

田植えが始まる時期なのに
水のかかった田んぼが見えない
田畑で働く人の姿も見えない
ここは事故を起こした原発から二〇キロ
今でも、ここは放射能が

毎時、三マイクロシーベルトを超える
山にはわらびやぜんまいが
ぞくぞく出たと言うのに

採りたくても採れない
畑の野菜もそろそろ育ってきて
食べごろになっても食べられない
その中に含まれている
目に見えないものが怖いのだ

新緑と山桜がやわらかに包む山々
春の草花が色とりどりに咲く家々
ここは計画的避難区域
間もなくここを去らなければならぬ
耕作地があるのに作物がつかれない
牧草地があるのに牛が飼えない
人々の暮らしがまるごと失われるのだ

みんなが待ちわびた春なのに
ここには命が蘇る春はない

フクシマの農婦

畑にも出られない農婦は
毎日、畑のことを考えていた
水や天気をいっぱい吸い込んで
日差しに葉っぱを広げる野菜
朝霧に濡れた茄子や胡瓜
夕日を浴びているトマトやピーマン

放射能という目に見えない
音もしない
匂いもしない

いつ、どんな影響が及ぶかも
誰にもわからないものが

風に乗り、
雨に混じり
畑や田んぼの水を汚した

農婦は畑のことを考えても
畑の仕事はできない
コメをつくり、
子どもを育て
花を愛でながら
働く盛りを逞しく生きてきた農婦が
田畑に囲まれた家を離れて一人
小窓一つの小部屋の中で
ある日、ひっそりと息絶えた

フクシマ牛

東電福島原発のシルエットが
陽炎のように浮かんでいる川辺に
牛たちが佇んでいた
ある日 突然
牛舎から解き放されて
人間たちが姿を消した
餌が与えられなくなった体で
心許なくモーと啼いた

人間たちが戻ってきた
やってきたのは白い男たち
違う、
懐かしいあの人ではない
何も言わずに近づくと

首をさすられて、チクリ
白い男たちは立ち去った

数日後、

暗い穴の中には

折り重なった黒い牛の塊

二〇一一年の六月某日

牛のいない牛舎のなかで

一人の農夫が首をつった

問いかけ

原爆と言う核の抑止力で

世界の平和が保たれていると

信じ込まされてきた世界

それで平和や紛争はなくなったか

原発で明るい未来のエネルギーと

そんなスローガンを掲げた町は

いま、豊かになったか

希望に満ちて栄えてるか

どこかおかしい

たくさんのお金を貯めれば

もっと便利な暮らしができ

それが幸福への道だと信じて

それを疑いもしないで

みんなでわき目も振らずに

走り続けてきた私たち

行き着いたところが

この福島の実現ではないか

これでいいのか

ちよっと立ち止まって

考えてみようではないか

当たり前の人間になって

素直な子ども心になって

自分の言葉で

考えてみたらどうだろう

石炭や石油は天からの贈り物

みんなで分け合い

補い合っていけばどうだろう

核の兵器で守らなくても

平和が保たれるではないか

原子力という恐ろしい

核のエネルギーに依存しなくても

あの町にも、この村にも

振り注ぐ光

吹き渡る風

流れる水など

安全で尽きないエネルギーが

満ち満ちているではないか

そんな当たり前のことに

みんなが気づくと

今までとは違った世界が

広がっていくではないか

新しい価値観の時代が

動いているではないか

原爆もいらぬ

原発もいらぬ

二年目の春

あの日から二年

バリケードに閉ざされ

途切れた道の向こうに

見覚えのある家屋が見える

あの日のままで立っている

押し黙って立っている

行き先も告げられないで

いつ戻ってくるかも知られないで

バラバラに散って行った人たち

残された家屋敷には

氷雨交じりの風が吹き募るだけ

あの日から二年

小川に雪溶け水が流れだし

新しい芽吹きを春を迎えても

人々の暮らしを保障する春は

まだやってこない

人の気配も消えてしまい

人の暮らしの痕跡も見えない

冬枯れの夏草が広がる風景には

セシウムやストロンチウムや

ベクレルやシーベルトや

そんな無機質な風が舞っている

目を凝らし耳を澄ませよう

福島第一原発事故で

大気中に放出された放射能物質は

七十七万ベクレル

広島原爆の約四七〇個分のセシウムが

地球環境に拡散した

空へ

海へ

大地へ

あらゆる生き物に付着し蓄積している

そして今も

たくさんの人々が被爆を強いられている

チェルノブイリ事故で

強制避難区域となった地域と

同じレベルの汚染地域で

赤ん坊も、子どもも

飲んで、食べて暮らしている

この現実と向き合って

この渦を生み出した出した社会に

目を凝らし見てみよう

日々、成長していく子どもたちの

これから生まれてくるものたちの

いのちの囁きに耳を澄ませよう

フクシマの女の子

あなたにささやくのは、わたし

これから生まれる女の子

まだ名前もないけれど

どんな顔かもみえないけれど

きつと、いるはずよ

あなたの心の中に

あなたは聞いたことがあるでしょ

福島第一原発事故で広がった

たくさん放射能を含んだものを

例えば、その中のセシウム一三七は

一・八京ベクレルという
とてつもない量

その半減期は三〇年

一〇〇〇分の一に減るまで三〇〇年

それが土の中に染み込んで

根から吸い上げる野菜や果物へ

それを食べて育つ動物の中へ

それを口にする人間の中へ

そして、わたしたちの体にも

それが一〇〇年たっても

一・八兆ベクレルを超えるセシウムが

福島土地や海を汚しているの

いつの間にかセシウムは、

わたしの血液や筋肉に住み着いて

いつ病気を起こすかわからないの

だから、あなたにお願い

「フクシマを風化させないで」

「こんなことを、これ以上広げないで」

「原発はいらない」

と声をあげて

あなたにささやくのは、わたし

あなたの心の中にいる

フクシマの女の子

野原で花をつみたい

クリもカキ食べたい

これから生まれるフクシマの子

孫たちが聞きにきた

保育園に子どもがいらないね

家に人がいないね

牛のお家にも牛がいらないね

田んぼは草がぼうぼうだね

どうして、どうして

そのとき私は話すだろう

あの忌まわしい原発事故のことを

孫たちは、さらに聞くだろう

そんな恐ろしいものを

どうしてつくったの

どうしてつくらせたの

そのとき、私は何と話すだろう

何も知らされなかったとか

だまされたからとは言えない

大人の責任として

その過ちから学んだことを

語らなければならぬ

やがて孫たちは、うなずくだろう

よかったね、原発なくなつて

もう安心だね

みんなで、がんばったから

手をつなぎ、希望をつないで

放射能に汚染された古里を見てください。

誰の目にも映る風景ですが、その奥にある

ものを見てください。

見えないけれど、そこにあったものを思

い浮かべてください。

孫たちとの会話

古いアルバムをもって

避難を余儀なくされ、古里に戻ることを
願いつける人々がいます。

生業を奪われ、田畑があっても耕作でき
ない人々がいます。放射能の不安を抱えな
がら今も生活している人々がいます。

汚染水漏れや、除染から出る廃棄物の処
理問題などの片付く見通しも、まだついて
いません。

原発事故は収束するどころか進行中です。
私たちは、俯いているばかりではいませ
ん。

いま新しい古里をつくるために、美しい
大地、海、空を、未来につながる命に引き
継ぐために、手をつなぎ、希望をつなごう
としています。

佐藤 邦男（福島県南相馬市）